

伊勢力叅官名所圖會

附録

一
下

					和書門
				二九二七	
			四		
			架	函	號
			類		

庫	文	閣	內	
七三函		二九二七		和書
三四		架	冊	號
		類		

內閣文庫	
番號	和 29127
冊數	8 (8)
函號	172 319



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



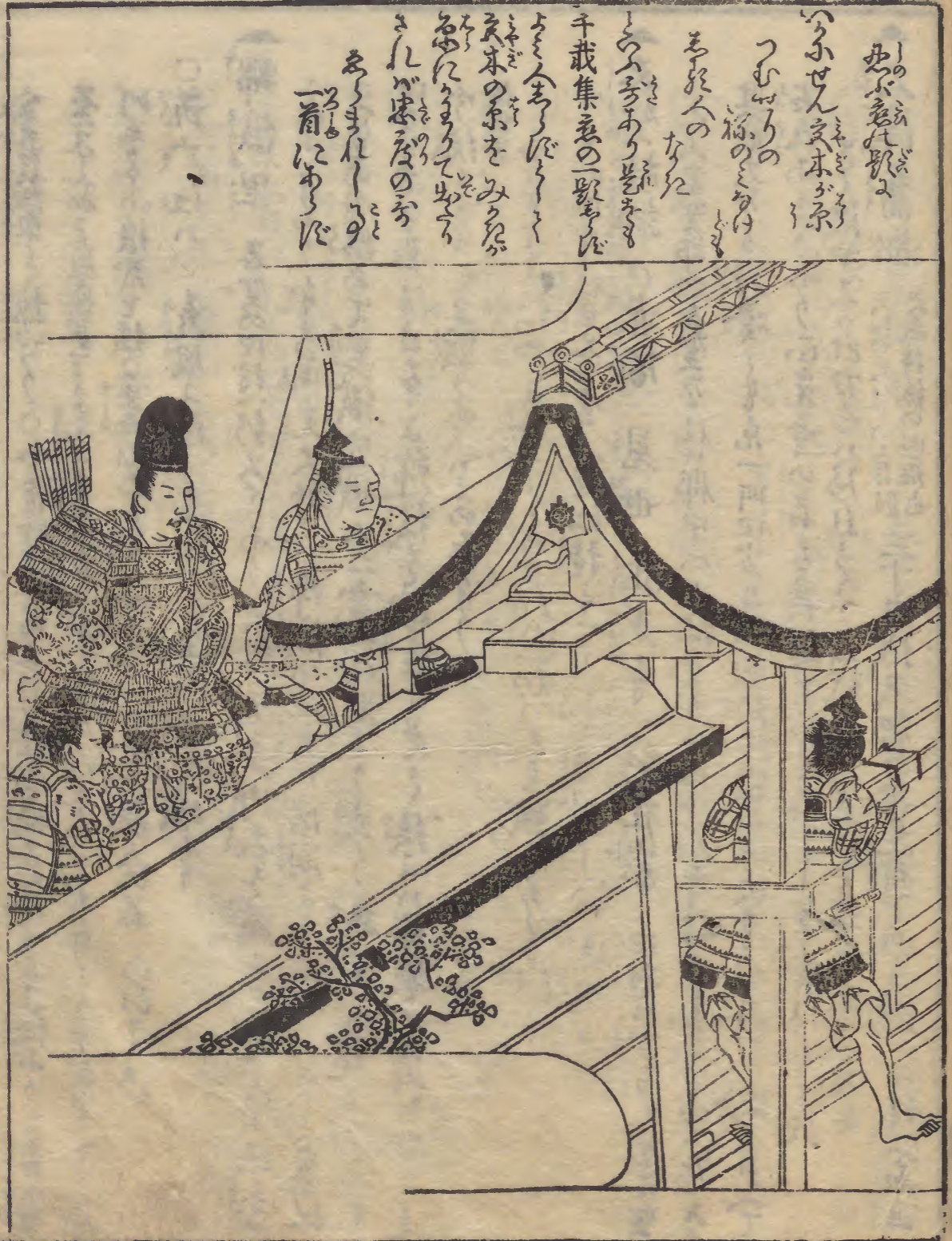
© Kodak, 2007 TM: Kodak



落武者忠度
 遺馬敵五条
 俊成御之門
 荒川より馬と久し
 詠たれし秀秋の
 巻物と俊成御之門
 一巻と討死乃
 後千載集
 さあ波や志賀の
 ひろくちふれ
 の一巻とあまれし
 とも勅勤のふれが
 ことよこ人あふれと死
 さいり平家物語
 けえて人のよく志賀
 石之物つよ平家
 物語の忠度の
 あり



一の巻は歌
 かなせん文本が系
 つむりの
 志賀人の
 一人あつて志賀も
 千載集巻の一歌を
 志賀人あつて志賀も
 志賀の本をみるが
 名はなまうて志賀
 さしが志賀の志賀
 あつて志賀の志賀
 一巻にあつて



附言 日本史より懐風藻紙引多天武大友の伝を希せり天智天皇
天皇帝之位を譲らんとして時これを受じりて僧となりて入る
去れり向く帝大友皇太子の皇子と成りて崩御の後却て吉野の
謀殺す大友と云ふはゆいりり國史日本紀の旨に類記せり此是流泥
滑して順遂の論は果と云ふ

貫之祠 小堀下の樹田に在り 貫之を撰みし一の宮と云 其地は後醍醐天皇御代に

此祠の祠に在りて水みやとれる月夜にのぼるるを云ふなりと云 貫之
此祠の祠に在りて水みやとれる月夜にのぼるるを云ふなりと云 貫之
計るる南は向ふ是つふ一の人家なるべし

貫之の中他言長谷雄の傳と云はれしを撰むる事云々云々 貫之
延喜中御書不承とありて後天徳とあり此は流泥と云ふ事云々 貫之
著と云はれしは天徳九年在御殿に遷りて卒す 貫之
是て後身友則及んば内躬順王生忠岑と云ふ事云々 貫之
之くるの序を撰れ奉安されしを撰む事云々 貫之

又勅を奉りて新撰和分集を撰む此時去依は任じ書成る事云々 貫之
帝崩り後云々 貫之
紀伊國及近江に時賢通のふりて是人のふり 貫之
黒王社 貫之の社の 貫之の志は是の事なり 貫之
仁和の神は天嘗會の和歌を載せし事云々 貫之
志は是の事なり 貫之
て流泥に入らば是の事云々 貫之
よりしは後天徳の字を改て大伴と云ふ 貫之

心静む 貫之 是の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之

所名

志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之
志賀山 貫之 志賀の事云々 貫之

くろぬいのち
 黒主洞
 貫之洞



くろぬいのち
 黒主洞
 貫之洞
 連綿して長等山の地を
 貫つて洞しておろす
 高野山洛の人此廟況の
 一ある一洞人の秘
 派多しをに方なる風流
 一の境なり其を此
 洞の其をを



人衆ありたりを本の下るもはさばかきかたき極花多し今もよく石表
此の定より東の湖あり三井寺大津西の白川洛中西山と肥厚の経勝あり

極成光
志加美寺の舊跡 志加美村の方より西の山へ石佛の大方あり其の寺は志加美の
拾芥抄志加美寺秘史山宗後寺天智天皇の建立あり後三井寺は後三井寺
これ之洞山教侍のゆり三井寺の流あり人より上人の教のゆり画より記と

穴六 此地都の流より後三井寺あり其の寺は志加美の山へ石佛の大方あり其の寺は志加美の
穴大舊都 穴六の高 景行天皇 成務天皇 仲哀天皇 三代皇居の池之
是と高穴穂の宮と云三代の同七十年。成務天皇の御宇に三井寺の宮あり

今もよく石表かたき極花多し今もよく石表かたき極花多し今もよく石表かたき極花多し
○仲哀の教あり其の寺は志加美の山へ石佛の大方あり其の寺は志加美の
一乃松院 穴六の高 景行天皇 成務天皇 仲哀天皇 三代皇居の池之
三好は松院をせむられ流るるを松院と云三代の同七十年。成務天皇の御宇に三井寺の宮あり

穴六 此地都の流より後三井寺あり其の寺は志加美の山へ石佛の大方あり其の寺は志加美の
穴大舊都 穴六の高 景行天皇 成務天皇 仲哀天皇 三代皇居の池之
是と高穴穂の宮と云三代の同七十年。成務天皇の御宇に三井寺の宮あり

所名 所名

洞澤あり此不要宮の地と云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
堀成築と其の時遠例ありと云とて洞澤ありと云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
新坊と云とて洞澤ありと云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
心と云とて洞澤ありと云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
をり乃松院と云とて

真葛原 穴六の高 景行天皇 成務天皇 仲哀天皇 三代皇居の池之
我意の松を去りて深くく其の葛原と云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新

上坂村 西坂下坂本 東坂本 西村ともいふ其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
これを極ると云とて洞澤ありと云とて志加美の大山嶽の軍地居のゆり新

元真如堂 志加美の南あり其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
十王堂 志加美の南あり其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
明智寺 志加美の南あり其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新

大権現御廟 志加美の南あり其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新
志加美の南あり其の寺は志加美の大山嶽の軍地居のゆり新

盛安寺

俗明智寺



滋賀院ハ 東叡山寛永寺の御里坊にて先俗云日光輪王寺宮の別院なり

開基者教法親王の後水尾院の皇子之妻ハ門跡傳へんより略之

慈眼大師廟 慈眼大師名ハ天海南光坊と稱し俗性中原氏外記賦忠の見て

殿中真用山之石佛あり其西干持御廟あり ○三佛堂

排宮 西坂町の山王祭の日大津に宮より大排と稱し此宮より伝

宥らせ行列の人数安ふ屯と

所名

日光山王社 村あり 舊傳云天智天皇の御宇ハ御膳所ありて桓武の延暦七

年ハ諸社建立せり後三系院迄之三年始て移幸日迄之三年始て排宮

の宮幣後をまらんとれより毎年ハ月祭中甲の日ハ宮入りたる祭事本

宮七社移社十日祭之史実云三度ありて後ハ長山門破郊の附廿一社ハ

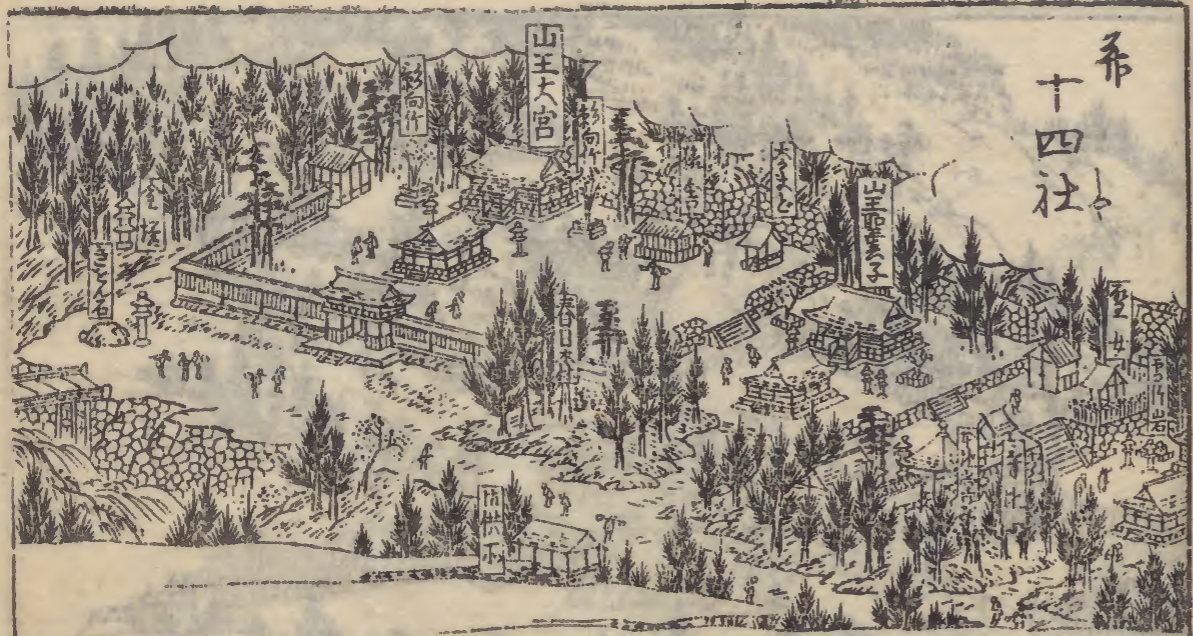
燒てして天正七年元の日ハ建まらる又神輿を振て天子ハ敷許をた

坂河院長治二年大内裏待受門ハ振るる始りして其後意安永承の

正元九年下守の我ハ御び殺害多し今ハ御ひく神輿の渡河ハ疾

威ありたりハばいやせよハ俗言ハ其遠凡たり

○西元日高方りて御りるの山ハ三ツハ短續とるりのハ王ハ是より



其
二
源
安
院



山王さんおうと云 ○日吉の山王といふは、日吉の山に在りて、日吉の山をエといふは、日吉と云なり
拾遺しゅうい抄しやう 恒吉こうきちもスニエスニエあり

後三条院日吉の社は、日吉の山に在りて、日吉の山をエといふは、日吉と云なり
○日吉の山王といふは、日吉の山に在りて、日吉の山をエといふは、日吉と云なり

一〇三〇〇あり日吉の神、さきうたえとのうひあふ代やるとん
後拾遺しゅうい抄しやう 恒吉こうきちもスニエスニエあり
心こころの女をんなのうらそふ珍めづのうらそふ七しちのやー海うみを宮みや居いせり

七社

○大宮おほのみや 大比おほひ殿のどの 大比おほひ明あき神かみと云 信のぶ形かたち老らう翁おう神かみ 垂たる跡あと大おほ己おの貴たか命のみこと 本地ほんち釈しやく伽が如にょ来らい法ぽう号ごうを法ぽう

宿しゆく大おほ善ぜん薩さつと云 此この國くにの地ちと云 左ひだり右みぎの竹たけを植うへり山やま王おう親おや向むかの竹たけと云 八はち幡ばんを執とり

三月十日三日 竈かまど殿のどの 猿さる舎やぐら 子こ孫そん 猿さる舎やぐらを子こ孫そん

大平おほひら記き十八じゅうはち大おほ海うみの上のうへ一いつ生せい荒あ生せい懸けん有あ佛ぶつ生せい如にょ来らい常じょう住じゆ有あ象ぞう易えいと云 故ゆゑの
著あきの中なかつ男おとこ 釈しやくの別わか此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ
の昔むかし後のちんで安やすく當あたりたる此この草くさの葉は果はつと一いつつつの海うみに流ながれ 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ
蘇そ麻ま大おほ宮みや権けん現げん垂たる跡あと 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ 此この波なみの流ながれ

○二宮ふたのみや 小比こひ殿のどの 信のぶ形かたち僧そう形かたち 垂たる跡あと國くに常じょう立た尊そん 本地ほんち藥やく師し如にょ来らい法ぽう号ごうを法ぽう

基もと善ぜん薩さつ ○天地てんち開ひら闢ひら天神てんじん等らと云 天地てんち二ふた義ぎの神かみ之の名な二ふた宮みやと云 此この神かみ

垂たる跡あとの右みぎを横よこ川がはへ移うつたの方かたの事こと 故ゆゑに大おほ岩いわ之上のうへ上かみ右みぎ白しろ髭ひげ明あき神かみと云

一いつ不ふにに名な波なみ母ははと云 松まつ尾おの二ふた宮みや林はやしと云 社やしろの元もと龜かめの兵へい火ひと云

○正月しょうげつ六む日にち神かみの祭まつり今いまの神かみを祀まつり 神かみ與よ葉はと云 故ゆゑに

○聖せい真ま子こ 唐たう老らう僧そう形かたち 垂たる跡あと心こころ戒かい吾われ勝かち尊そん 本地ほんち阿あ彌み陀た法ぽう号ごう八はち

幡ばん大おほ善ぜん薩さつ ○日記にっぴ云いて神かみ之の心こころの神かみ志し中ちゆうより出いせと云 天てん武ぶ

天皇てんかう白しろ鳳ほう年ねん中ちゆうの教きやう向むかの宮みやの左ひだり右みぎに植うへり 傍かたわらに本地ほんちあり

○八はち王おう子こ 僧そう形かたち 垂たる跡あと國くに換か去そ尊そん 本地ほんち手て親おや音ね 崇そ神かみ天てん皇かう即すなは位ゐ

元もと身みの積たか座ざにして八はち百ひやく善ぜん神かみ大おほ祖そ元もと氣きの神かみ小こ比ひ殿のどのの左ひだり金かねの山やまの

傍かたわらに八はち人の皇かう子こを列れつ率しゆつして天てん海かいありと云 八はち王おう子こと云 二ふたの宮みやの左ひだりありと云

○三さん宮みや 唐たう女にょ形かたち 垂たる跡あと愷かい恨こん根こん尊そん 一いつ説せつ 天てん照しょうを神かみの三さん女にょ 本地ほんち普ふ賢けん

善ぜん薩さつ ○日記にっぴ云いて三さん女にょ親おや向むかの左ひだり三さん宮みやと云 日ひ下くだく八はち王おう子この峯かみと云

比ひと二ふた社やしろとも蘇そ麻ま大おほ宮みやと云 送そう拜はいあり

○客人宮 唐女形 垂跡淨辨冊尊 本地十一面觀音 一説曰白山

○妙理控現 桓武天皇即位延曆元年八王子の栴蓐又天澄と。旧記云

文德帝天安二年六月十八日迁宮 聖人の三年八月七夜栴蓐に於て

○雪竹の岩 宮の傍 此宮のりうと。神輿の級は牡丹輪捧

○十禪師 若僧形 童子形 垂跡續く辨尊 本地地蔵菩薩

旧記云十若天七地三の教之師の國之禪のゆづる十若天子國と讓

るの義之 桓武天皇延曆二年正月十六日新向 三月廿四日廿五日新れ辨講

乙上七社 後後撰

大宮 右の藩乃と年いりるたのあひをよとるきれつと也 後未撰

二宮 やまのうらみを教と栴蓐し墨のきりり此光のりいとも 慈園

聖雲子 ちりりる光のる魚とあじく西の雲丹れ秋の産乃月 僧都 良仙

客神 今 ちりりる光のるをけりやとひまじの白根や若れり聖 後未撰

十禪師 本のかれ深雲の照り光とそとるきりりいりる乃月 後未撰

撰属十四社

○下八王子 垂跡天河中尊 本地虚空蔵 本地石船とる石あり 乞路

○王子宮 十禪師辨殿の傍と左 垂跡建御名方神 本地文殊 旧記云

○早尾 垂跡素盞烏尊 一説後田彦 本地石勒 旧記曰馬場頭

○大紗司 垂跡高皇產靈尊 本地毘沙門天 傍に每天の社あり

○聖女 下照姫とある 本地如來論觀音 延喜年中造立聖雲子乃

右の方よりあり 俗に聖雲子の母なりといふ

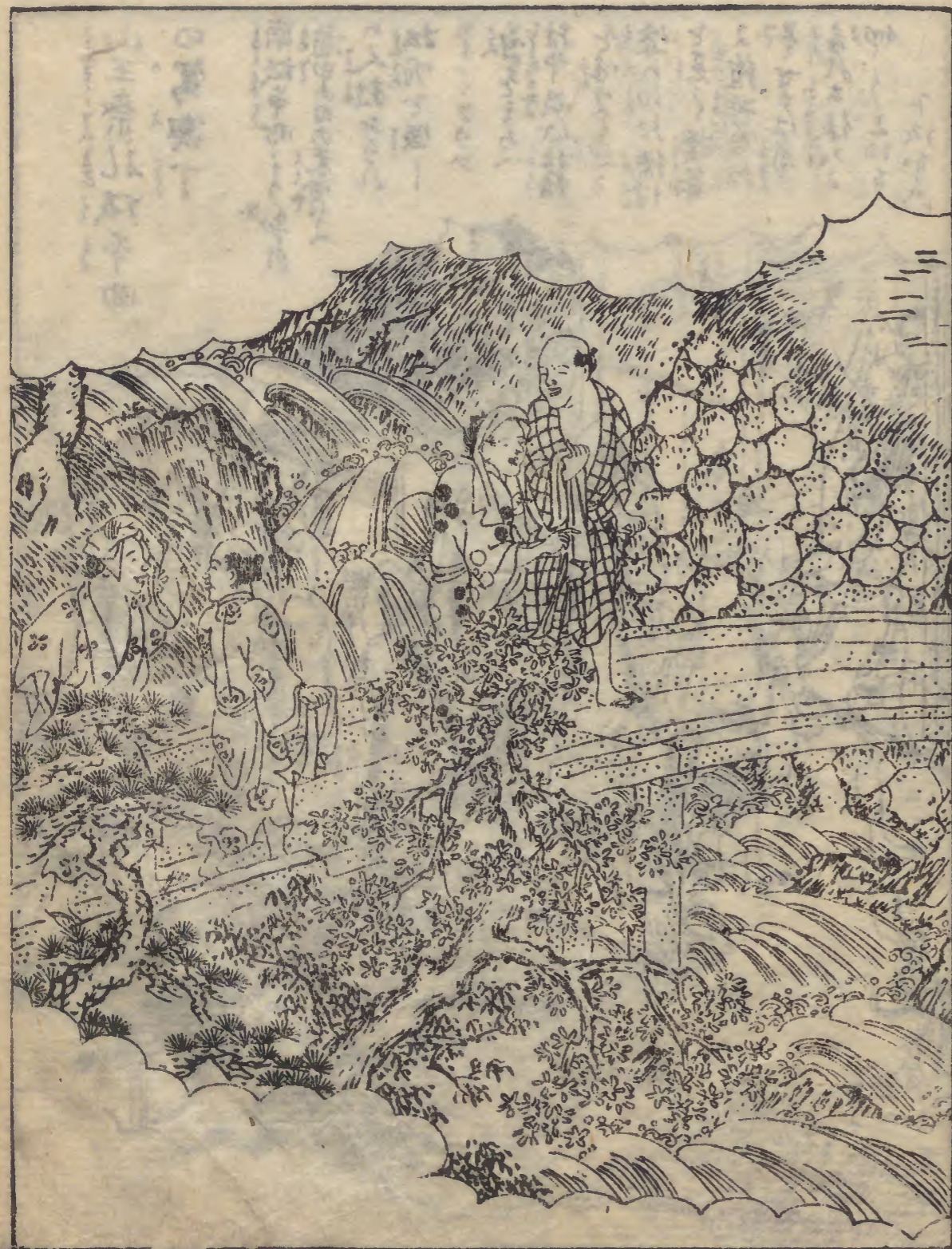
○新婦奉 瀧津姫とある 本地吉祥天女 旧記曰天照神素盞烏の神と

○山末 本地摩利支天 垂跡未詳

○牛尊 八王子の社あり 本地大威徳 傳曰牽牛星公なる

○新牛尊 牛尊より出寒の日栴蓐の口門に此像をきて夜をそとる

○小禪師 垂跡彦火と出見尊 本地弥勒龍樹



橋殿中の橋
賀興丁巻
く此
捲いと

山王祭礼坂本町の
駕輿下

南坂本町より物
者申の日の花青
いんねがふれ
松明と喧し
エー、ラウの
音をきくへ
村中及びは
をわつと
染いゆに
とよく
二燈
尽せるは
左に依入
ゆる上坂
下坂

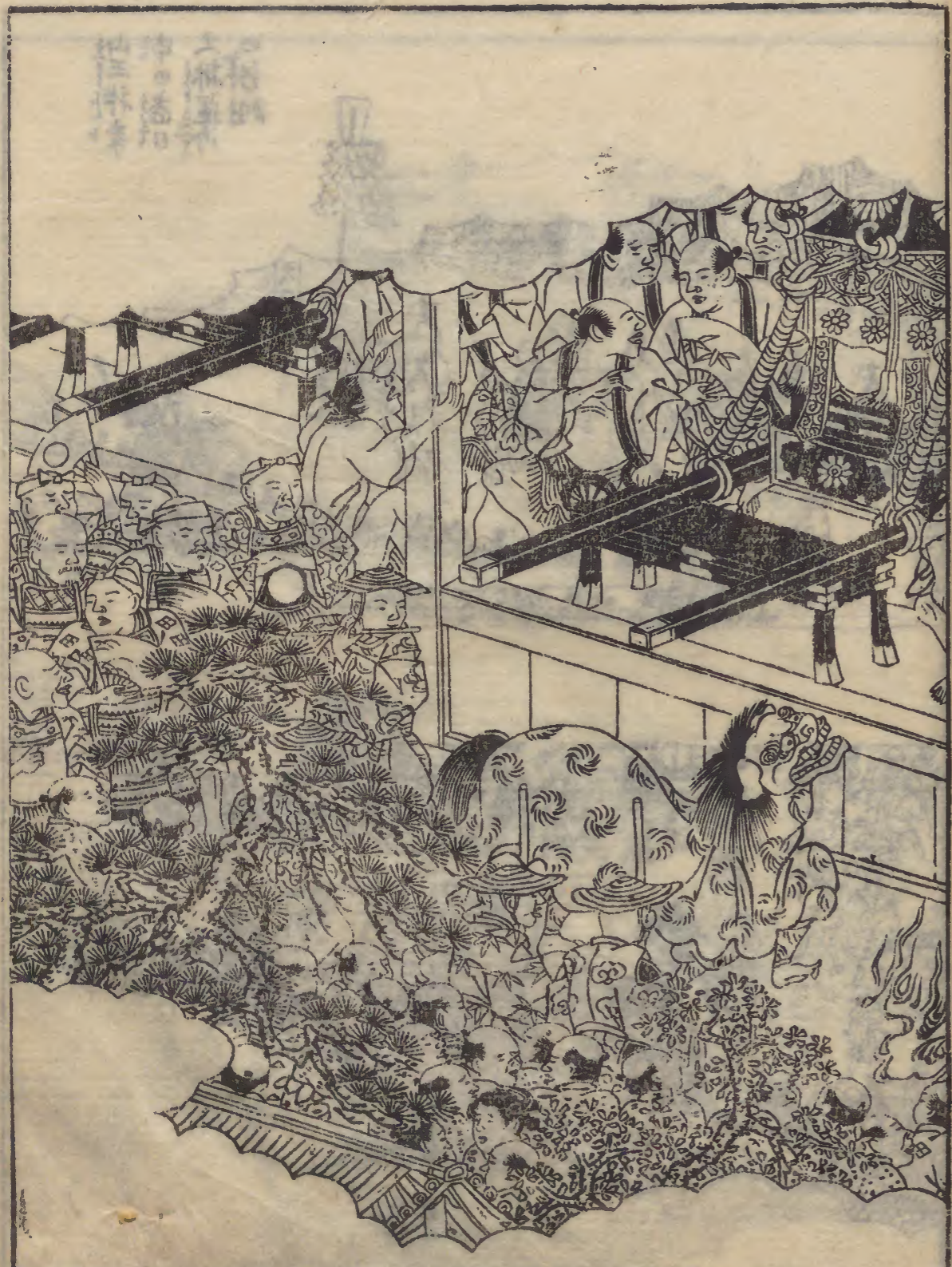


人おの三日
ゆり
常
甲胃
孝子の母衣
よの
付物を
つて

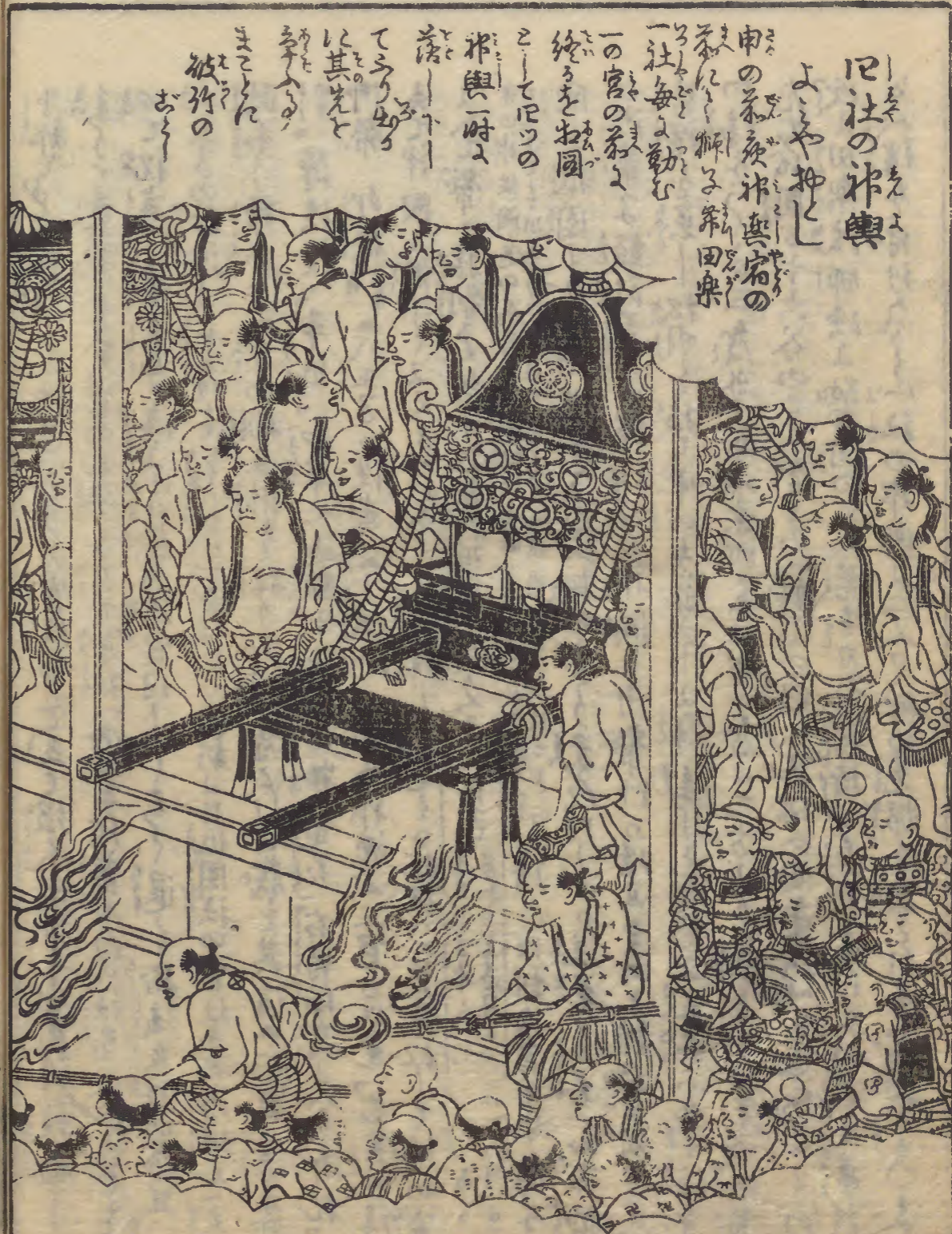


院天仁二年に月廿二日勅して十禅師の神輿を造らしむ日希永之二年卯月廿一日
又三宮の神輿を造る六十日代圖融院天元二年卯神夏富津漢より奉り
の浦よりて龍院齋前の社を造り伶人二十余輩舞樂を奏し七十一代後三
條院延久二年卯月廿三日卯官幣使を立られ八十日代順徳院建曆三年十
月十八日祭礼の日勅使左近衛權中納言源宗實平朝臣宗茂より勅使
総力して今より沖松祭の始より後光嚴院延久年中洪水已後の例なり
然るに元龜の兵火よりして祭礼も之より断絶す天正の聖朝よりして神
殿祭礼も相再興ありて今又連綿より其祭礼に正月より始り且ど
ゆきもを今より始り作りて神祇の人の後とす
○正月十八日大政所より其の後みえをより七社牛王二通并擡十二枚けてこれを
二宮十禅師両社宮仕の内三齋各番又洞進とすべく祭礼の儀式三齋の勅あり
○三月二の申の辰刻八日寺三宮両社の神輿各儀より社拜殿へ入りてまゐる
○三月廿八日の山門の儀より大排の之本のありてこれを曳き
飯室廣乃芝松まきく出りて是日月晦日早見慶道は捨て神酒を修へ
仕祝言と此附七社の宮仕は手を排りけて並居て神酒を頂戴と排り人五十人
むら排を拵各供奉し大宮の東の方より入りて七社の神祇小社も
各排を立る○卯月卯日祭礼の始りて七社の宮仕神所へ奉りて○卯月三日酉

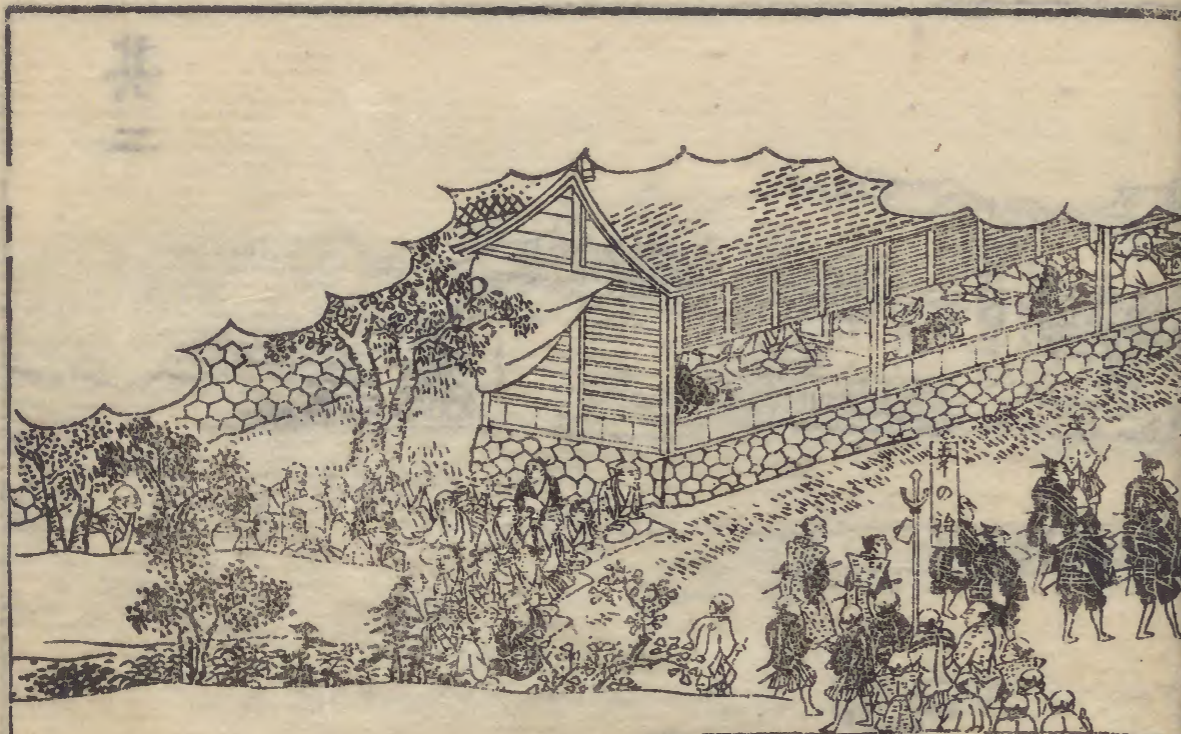
大宮中殿は抄ひく神酒を二社に供し排調進の宮仕祝言して皆大宮中殿
又系候と今日神酒樽是打二膳去置世大宮并和布十把執柄代より排調進
の宮仕へまきく下りる先神供の用あり○日刻大津に宮より大排神迎ひより
系松本明神の神人お添各布衣袴馬を乗り樓門の外より下馬して大宮乃
拜殿正面は芝松と宮神の宮仕大宮の階より御むひの人は勅杯三度と
て人主等松明をとりて排を捧持して大宮の後をまゐる西の方より社の正面
日陰の内より幸の神も日く入之社階階をりて種おの下は祝言して退出
是より幸神は早尾大初めの画像をうけし先より大松明をせし樓門より
排は出りなりて大津に宮へ渡りあが踏次の敷毎を燈とく○卯月祭礼若
世の日と門より燈籠の宮へ一通を献とあれは府の宮より奏國の通の内侍
へきり奏圖を経て女房奉書紙燈籠を奉りて執柄代へ勅許おとす
の所役者よりこれ卯月廿五日の山門より諸方祭礼の役人粟津御供中神
輿下よりと下知の一通を送る○次は卯の日大政所のをを奉り神祇を
○卯月廿日祭の午の日卯八王寺祭礼これ午の神祇といふ先八王寺三の宮の
神輿を両宮より早出を難不の坂をりて二宮拜殿へ渡りける警固人此
よ抄ひく燈をぬきより中夜焚きとてあけし神祇供と大宮社
居る一老もよ向す奉幣おとす退く此日又此の五社の神装束は



徳川幕府
 御祭儀
 御神輿
 御獅子舞
 御松竹
 御田楽

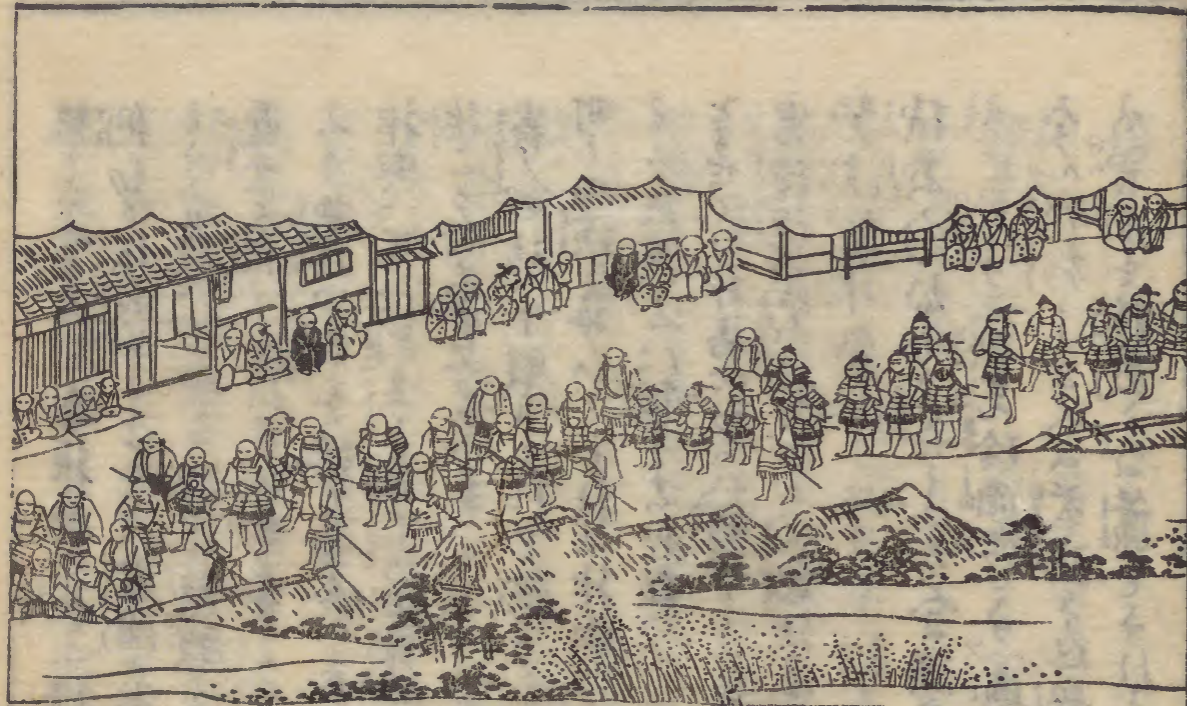


日社の神輿
 よしや押し
 申の系彦神輿宿の
 一社毎々勤む
 一の宮の系彦
 終るをお國
 こして日ツの
 神輿一時よ
 落一ト一
 てさうさ
 に其先と
 まことん
 彼竹の
 おさ



山王作奉
申の節日
文排還御
の辨列

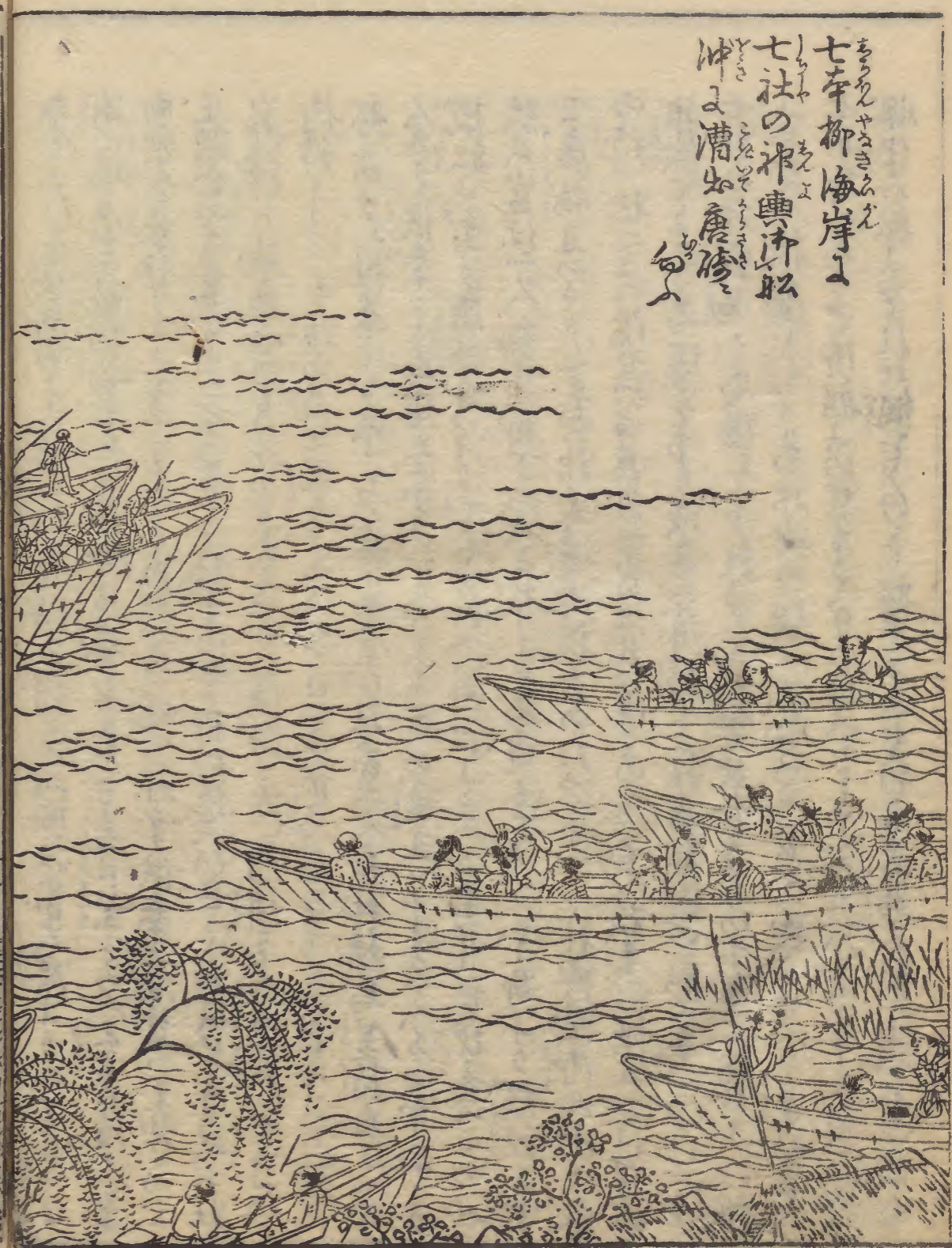


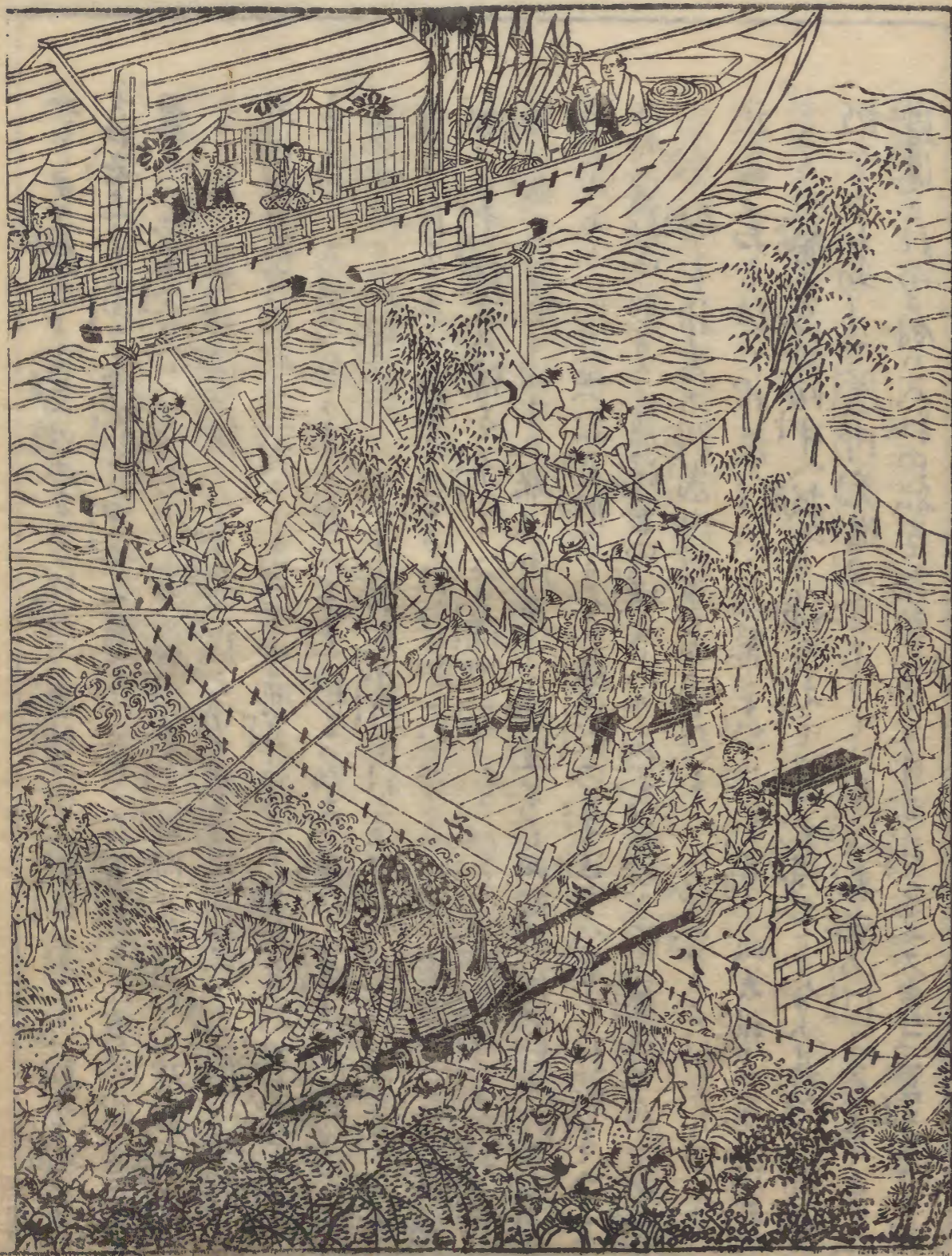


張るるに多神輿の若小獅舞回樂は社の輿毎に次第は二宮よりい
納むるお家よりて公人勝満くは社の駕輿丁揃ふるといふ時勝満
こゝに其府神輿を一時は拜殿より下りてかき出さるる遊藝者より
遅れをうらふに龍の巻倉より式法の列を定め二宮格取より夜宮乃と
より熱社の系を経て惣合の巻舟より大宮の拜殿入り
神輿一不に列立と政不の回籠へ後殿して惣合の巻舟の下に押ひく
掛るる時大宮方の回籠も一度は巻舟をたぐる。次はに社の宝殿の内陣へ神供あり
客人の社に下殿みこを供ふ巻舟は八ヶ度の其一ツ也。○二の申の日に下坂本
町の漢と申ひく七社の神輿の方船を揃む舟二艘を合せ合せ船渠より
まゝに其より板をまれば板のより各棹進行に本をまて七本板の方舟船
とよめる。○神馬の船八艘目く此漢と申く是満くの後。○酉日申の日に大
宮格取の祭礼あり又知神供神宝等と傳へ退く三院衆徒系諸拜
祭法施神樂あり此日午刻斗は山門の衆徒三塔各集来不又集りて
接衆入の秘あり谷々の云々酒多成たきふ人糧を忘るる力と持をよ
きて飲め三鉢先冷酒也るる一遍うて次は若者深の小舟をひく次は酒二
るん船のり人よ系並とせ衆徒馬場より出は各棹あり入る其間云人系
は警固と接衆とる藻とこれ各飲食あり船若飯酒肴等これを

設く四の接衆入りは人系並と次は小舟を一人肩をせり長須禱と云
一神廟のりら法師の肩に法師白布一壇肩よりゆてのせり次は若大
衆系結成云々老僧日く後思いと座に坐りて三院互は酒接祝言これ
あり其飲食應の思のりよりこれを設く。○未の刻は粟津神供船の
山門衆徒代二通接衆持きる。○日刻座の宮より幣役大宮へ系り此の
泡裳五條袈裟着て神幣七本之袂直うて是を相待。○日刻社家二人夜冠
幣自分の宅より系馬は政所の系を通り馬場へ出て大宮へ系候と云々
の幣七本系をにるる社家のより出仕座の幣七社の神輿と稱し祝言
てとる大座ののりやと。○座の宮の幣役大宮の階を三どんより付宮柱の
枝一抱りて退て其日上系ありとらん。○大宮御室系は神馬一疋と牽て
神輿と各柱の枝を在る。○大津に宮よこれあり大津年の刻斗より坂本神乃
宮に渡河ありこれに宮松本平神明神栗津又本社の人等供奉し奉
る前後きびく教言固らるるを祝言寺曲みありて河神を當り齋例して
其石の瓶治禱と云々を忘るる牽の神と申し繩を打てこれを治し畢つて
坂本より。○未刻宮は三人神の宮へ系り向此内容人の社の宮は三人
奉幣祝言と其餘七社の宮は内二人の神つて神を大宮へ供奉し○未
の刻教言固の云々下坂本比敷の使者とる糧を看る中のを舟の下

ちのちやまきふえ
七本柳海岸よ
七社の神輿舟舩
沖は漕舟唐船
舟





其二

如とも又急みて先沖の方へこれより唐修の口又町斗南より御船を備え
七社名あり前々名の列り中央大宮の左二宮の右聖美子二宮の八王子
聖美子の南宮人の八王子の山三宮の宮人の南十禅師其次に神船各東向
かりあり又各神酒瓜供し奉幣祝云ある粟津の神供は日時之粟津の
御供船の大宮の船をお對し東の方半町斗南より御船を備え小松
より大宮の船より船人より素袍を著し赤色の袴とく
船の漕中うになまありとて大宮の本守これを受て客人の宮より
宮はこれをえとて社家より社家より奉幣祝云と次又御供
船より素袍と又條を著し僧御船といひし御船瓜供と次又御
海へ渡るとり七に十九膳系御菓子御酒名と此間御供の船中に抄い
音樂あり又御供船屋形の人み後の船の奉子七人居く御戲を
此御宮は小松より唐修南の漢より神馬といひし還御より
言奉幣と神馬の別當御幣七本を持系して次又これをい
神馬といひし御幣といひし此幣をて社家賽し此幣は御供船の
くより此幣を皆海中へ投入し幣をてはみ意佛をとり其御し神船
敷をうら出して還御先進次ありて比敷は若宮の江より奉奉る御
還御これあり御し社の船を指箇しり半町斗南と大宮二宮先きに

着奉りし御幣一三宮を後殿といは八條様大徳の家を焼けてるを
ては此御の駕輿丁ハ比敷は村之二社で八條の下迦羅陀山地蔵寺にて
御奉る是より谷々の云人三院の谷其社の長者并院々の奴僕等て各々
社の飯屋へ奉るこの御日已刻社家各社花に菊拍子をうらして御幣を
うらひし賽し多神輿在嚴の具ともをえとらふ

賽のり百三十奉るに廊の神子大宮より御し物あり

郭云深と谷より出にうり外にれとてみ奉そ地ら奉れ 三五

西社明神 東坂本末洋修へてのふおとこい 東坂本並末松の傍より奉れ五月廿三日

七本柳 東坂本の 柳七本生ひより奉り七社の神輿系船の漢かり

坂本城址 下坂本松林の漢一町半と城と 信長云戲山を焼くらひ此不城を築

明智日向守といはし其後天正十年先秀信長云を殺し日向守馬

女をて安去の城をまはし秀吉中國より馳のかり明智いし秀吉人

明智利ありて勝隆寺の城よ入り此御を馬女安去みめて軍葬を

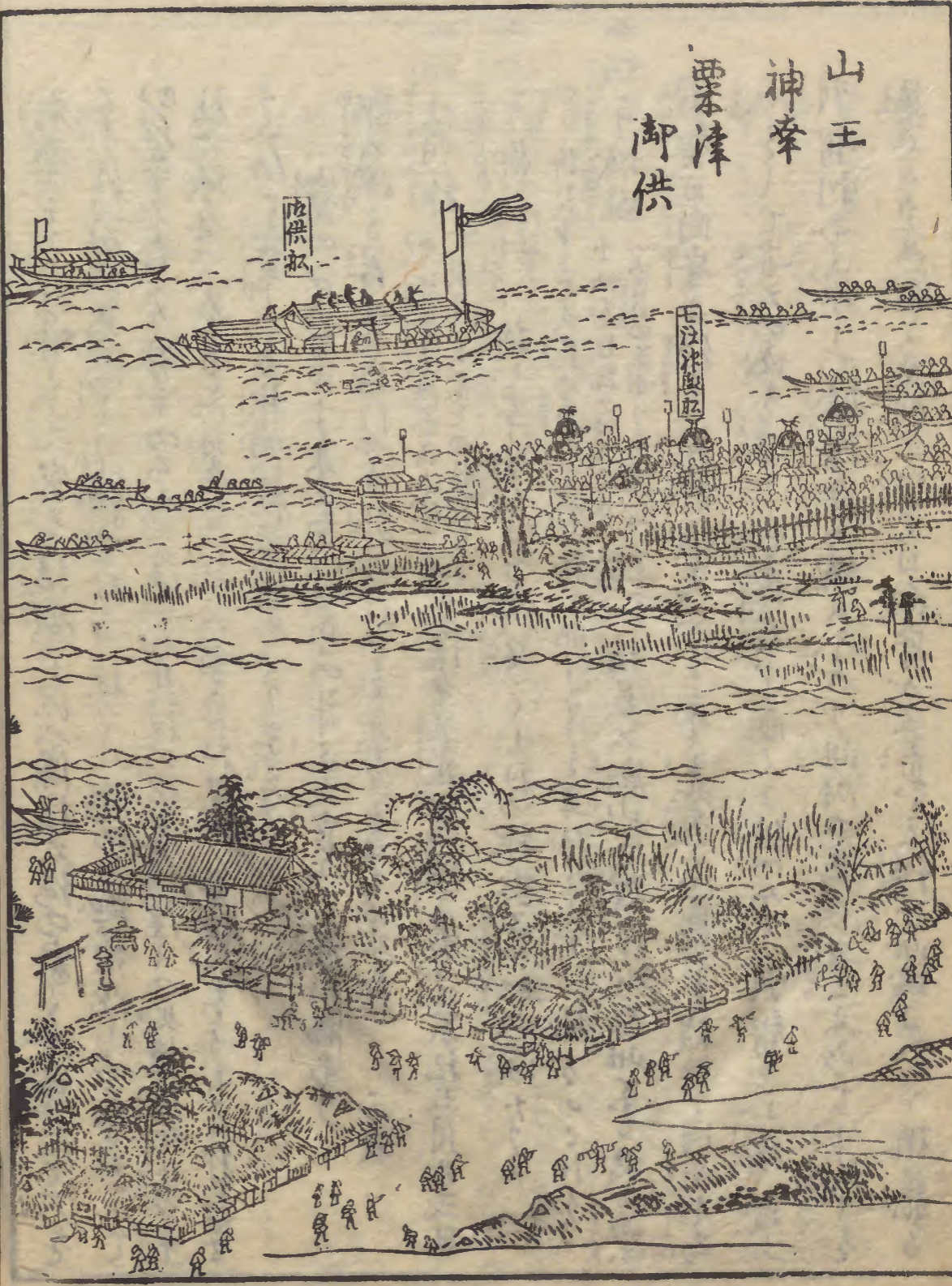
集ありみ遂に我死とて日向守が子息を傳ひ此城よ入り楯籠る

唐寄羽神

并孤松



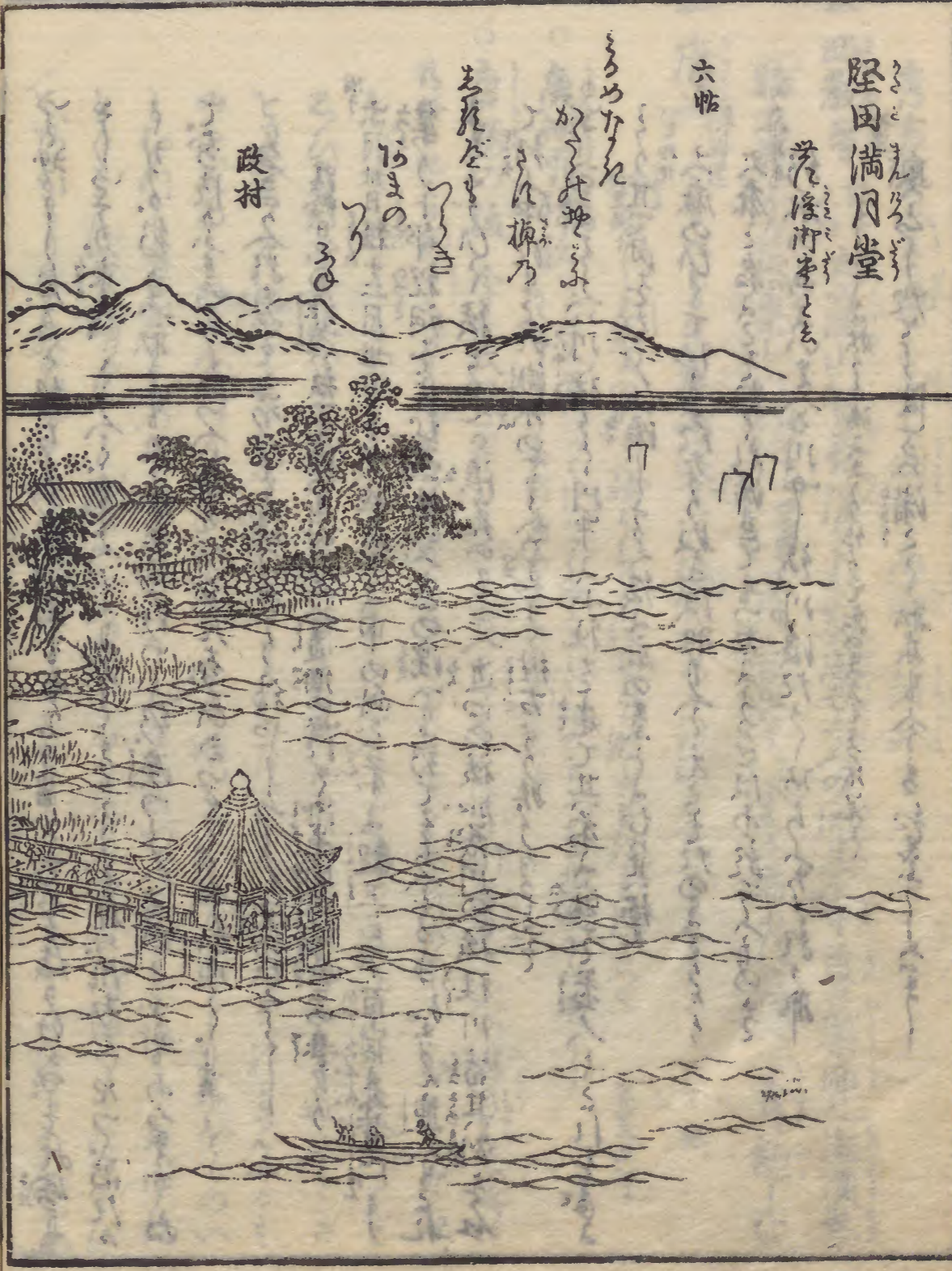
山王
神幸
栗津
御供





頂明寺
川
屋
堂

を
見
始



堅田満月堂

若
原
寺
と
云

六帖

と
り
か
か
れ

か
く
此
地
よ

ん
柳
乃

志
願
堂
も

つ
き

は
ま
の

つ
き

政
村



よき京之西に比良のき根あり

ふみとは小松が岩のまじり風もらうても花はまきまきひき

揚梅瀧 小松の町の南のふもと西の方けらひあり

鑑岩 五つ尻かどこひまきく小松と白鷺明神の海辺に此間岩懸あり

屏風をまきろが地をを継来とこの間六町半此邊とて奇石あり

白鷺明神 比良の麓ありあり比良明神も寄く 人皇は十又代聖武天皇を詔ありて

美合をりりめ終へた老翁と他記して良布僧にありし神の誓ひあり淡海

志曰永禄二年の早に九月十九日白鷺大明神社の前の海を町斗入石のき

つらに中内九日をも身拜殿の邊まで湖ありて再びんがらるるに

許の石佛あり此内二十坪ありあり明神より南の志賀郡小の石部あり

大溝 城郭あり天正年中織田七玄清信澄居城しと其後分郡在京亮この

城を揚りて代々居せらるる

發行

書肆

江戸日本橋南壹丁目	須原屋茂兵衛
同 浅草茅町二丁目	同 伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 兩國横山町三丁目	和泉屋金右衛門
同 下谷池之端仲町	岡村庄助
同 日本橋通二丁目	須原屋新兵衛
同 芝神明前	和泉屋古兵衛
京都三條通御幸町角	吉野屋仁兵衛
尾州名古屋本町通	永樂屋東四郎
同 同所	菱屋 藤兵衛
同 同所	菱屋 平兵衛
大阪心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛板

